# 救命後の生活まで見据えた救急医療の実践、教育に注力

熊本大学病院 救急部　入江（いりえ） 弘基（ひろき） 教授

**熊本大学病院の救急部は、整形外科やリハビリテーション科の専門医でもある入江弘基教授が率いている。入江教授は救急・急性期から慢性期までを見据えた診療とそれを担う人材育成を進め、熊本県内の救急医療体制の充実を目指している。**

1995年熊本大学医学部卒業、同大学整形外科入局。同大学病院救急・総合診療部講師などを経て、2021年から現職。同大学病院病院長特別補佐兼任。

**―救急部の特色は。**

２０１０年に開設された当大学病院の救急・総合診療部が21年、救急部と総合診療科に分かれ、私が救急部の教授・部長に就任しました。現状では専属で所属するスタッフだけでは救急外来を回すことが難しいため、他診療科の協力を得ながら運営しています。

熊本県内には救命救急センターが３施設あります。当大学病院は３次救急を担っていますが、救命救急センターではありません。このような状況の中で私たちが果たすべき役割は、大学病院として医学生や初期研修医への教育、救急科専門医の育成・派遣を行うことだと考えています。

当大学病院では救急部で初期治療を終えた後、必要に応じて他診療科に患者さんを委ねています。これは診療科がそろい、特定機能病院でもある当大学病院ならではの特色だと考えています。救急搬送の受け入れ時から他診療科の医師と治療に当たるケースもあり、教育面でも各診療科の専門性と最新の知識を学べるというメリットがあります。また研究をして学位取得を目指す人の受け皿にもなりたいと考えており、学内の研究室とタイアップする形で指導ができるよう、準備を進めているところです。

このように特色を打ち出し、県内の救命救急センターの３施設とは人材育成面で連携を深め、競争ではなく共存ができればと思っています。この３施設も当大学病院も熊本市内に位置しており、県内で３次救急を担う施設が市内に集中しています。特に天草地域や人吉地域へは移動に時間を要するため、今後は専門医を多く育てて、３施設だけでなく市外にもスタッフを派遣することが大きな目標です。

**―ご自身のバックグラウンドは整形外科です。**

大学卒業後は整形外科に進み、手外科を専門にしました。当時、スタッフが持ち回りで集中治療部に一定期間勤務していたのですが、全身を管理し、救命にも関与できたのは非常に新鮮な体験でした。１年半ほど経験を積み、心肺蘇生法や重症患者への対処などを興味深く学びました。その後、専従医による救急外来が開始されることになり、集中治療部での勤務経験がある私に声が掛かり、救急外来を担当することになりました。

私は今も手外科の手術にも携わっていて、主に指導者の立場で参加しています。手外科の専門医を育成する県内の研修施設は少なく、指導体制を維持するのも私の役割の一つだと考えています。

**―救急部の人材確保が今後の課題ですね。**

医師の働き方改革などの影響で、救急科専門医を他施設からリクルートするのは非常に難しいと感じています。幸い、23年度は専攻医が１人加わってくれました。これを皮切りに人員を増やして専門医を育成すると同時に、他科から転向する人を受け入れやすい環境づくりも進めていきます。私のように外科系の専門性を身に付けた上で救急科専門医になる道もありますが、最初に救急で全身を診て、関心を抱いた領域を究めるキャリアの積み方も良いのではないかと思います。

私は救急科、整形外科などに加え、リハビリテーション科の専門医でもあります。救急・急性期から慢性期まで、すなわち救命後の患者さんの生活までを見据えた診療を心掛けてきました。高齢化に伴い、高齢の患者さんの救急搬送が増えています。救命だけでなく、患者さんのＱＯＬを高めるために何ができるかを考えなければならないことを、今後も後進に伝えていきます。

熊本大学病院 救急部
熊本市中央区本荘1-1-1
☎096-344-2111（代表）
https://www2.kuh.kumamoto-u.ac.jp/kyukyu/